

ゆく雲

一葉女史

青空文庫

記者曰、一葉女史樋口夏子の君は明治五年をもて東京に生まれ、久しく中島歌子女史を師として今尚歌文を學ばる 傍、武藏野、都の花、文學界等の諸雜誌に新作小説多く見えぬ、

(上)

酒^{さか}折^{をり}の宮^{みや}、山^{やま}梨^{なし}の岡^{をか}、鹽^{えん}山^{ざん}、裂^{さけ}石^{いし}、さし手^での名^なも都^こ人^{びと}
 の耳^{みみ}に聞^ききなれぬは、小^こ佛^{ぼとけ}さゝ子^ごの難^{なん}處^{じよ}を越^こして猿^{さる}橋^{はし}のな

がれに眩めき、鶴瀬、駒飼見るほどの里もなきに、勝沼の町
 とても東京にての場末ぞかし、甲府は流石に大厦高樓、躑躅が
 崎の城跡など見る處のありとは言へど、汽車の便りよき頃にな
 らば知らず、こと更の馬車腕車に一晝夜をゆられて、いざ惠林寺
 の櫻見にといふ人はあるまじ、故郷なればこそ年々夏の夏
 休みにも、人は箱根伊香保ともよふし立つる中を、我れのみ一
 人あし曳の山の甲斐に峯のしら雲あとを消すこと左りとは是非も
 なけれど、今歳この度みやこを離れて八王子に足をむける事これ
 までに覚えなき愁らさなり。
 養父清左衛門、去歳より何處斯ふいふ噂があとくに残らぬや
 う、郵便爲替にて證書面のとほりお送り申候へども、足り

ずば上^{うへ}杉^{すぎ}さまにて御^お立^たかへを願^{ねが}ひ、諸^{しよ}事^じ清^{きよ}潔^{けつ}にして御^お歸^{かへ}りなさ
 るべく、金^か故^こに恥^はぢをお搔^かきなされては金^{きん}庫^この番^{ばん}をいたす我^{われ}等^らが
 申^まわけなく候^{こう}、前^{ぜん}申^ませし通^{とほ}り短^{たん}氣^きの大^{おほ}旦^{だん}那^なさま頻^{しきり}に待^まちこがれ
 て大^{おほ}ぢれに御^ご座^ざ候^{こう}へば、其^{その}地^ちの御^お片^{かた}つ^つけすみ次第^{しだい}、一^い日^{にち}もはやく
 と申^ま納^な候^{こう}。六^む藏^{ざう}といふ通^{かよ}ひ番^{ばん}頭^{とう}の筆^{ふで}にて此^{この}様^{やう}の迎^{むか}ひ状^{じやう}いやと
 は言^いひがたし。
 家^{いえ}に生^はぬきの我^われ實^{じつ}子^しにてもあらば、かゝる迎^{むか}へ^へのよしや十^た度^{たび}十^{じゆ}
 五^ごたび來^きたらんとも、おもひ立^たちての修^{しゆ}業^{ぎやう}なれば一^い卜^{はく}廉^{れん}の學^{がく}
 くもん問^{もん}を研^{けん}かぬほどは不^ふ孝^{こう}の罪^{つみ}ゆるし給^{たま}へとでもいひやりて、其^{その}我^わ
 まゝの徹^{とほ}らぬ事^{こと}もあるまじきなれど、愁^つらきは養^{やう}子^しの身^み分^{ぶん}と桂^{けい}次^じ
 はつく／＼他人^{たにん}の自由^{じゆう}を羨^{うら}やみて、これからの行^ゆく末^{すゑ}をも鎖^{くさ}り

につながれたるやうに考へぬ。かんが

七つのとしより實家の貧を救はれて、生れしまゝなれば素跣足のすはだし

尻きり半纏ぼんてんに田圃たんぼへ辨當べんたうの持もちはこびなど、松まつのひでを燈火ともしび

にかへて草鞋わらんじうちながら馬士歌まごうたでもうたふべかりし身を、目鼻めはな

だちの何處どこやらが水子みづこにて亡うせたる總領そうりやうによく似たりとて、

今はなき人ひとなる地主ぢぬしの内儀つまに可愛かあいがられ、はじめはお大盡だいじんの旦だ

那んなと尊たつとびし人ひとを、父上ちちうへと呼ぶやうに成なりしは其身そのみの幸福しやわせなれ

ども、幸福しやわせならぬ事ことおのづから其中そのうちにもあり、お作さくといふ娘むすめ

の桂次けいじよりは六つの年とし少したにて十七ばかりになる無地むぢの田舎娘いなかも

をば、何どうでも妻つまにもたねば納おさまらず、國くにを出いづるまでは左さまで不ふ

運うんの縁ゑんとも思おもはざりしが、今日けふこの頃ごろは送おくりこしたる寫真しやしんをさ

へ見るに物うく、これを妻に持ちて山梨の東郡に蟄伏す
 る身かと思へば人のうらやむ造酒家の大身上は物のかずな
 らず、よしや家督をうけつぎてからが親類縁者の干渉き
 びしければ、我が思ふ事に一銭の融通も叶ふまじく、いはゞ寶
 の藏の番人にて終るべき身の、氣に入らぬ妻までとは彌く々らい
 よく々らの重荷なり、うき世に義理といふ柵みのなくば、藏を持
 ぬしに返し長途の重荷を人にゆづりて、我れは此東京を十年
 も二十年も今すこしも離れがたき思ひ、そは何故と問ふ人のあ
 らば切りぬけ立派に言ひわけの口上もあらんなれど、つくろ
 ひなき正の處しもとに唯一人すてゝかへる事ことのをしくをしく、
 別れては顔も見がたき後のちを思へば、今より胸の中なかもやくやとして

おのづか
自ら氣もふさぐべき種なり。

桂次けいじが今いまをる此こゝもと許ゆるは養家やうかの縁ゑんに引ひかれて伯父おぢ伯母おばといふ間あひだから

也なり、はじめこのやて此家このやへ來きたりしは十八はるの春はる、田舎いなかじま縞しまの着物きものに肩縫かぬひ

あげをかしわらと笑わらはれ、八くちつ口くちをふさぎおとなて大人おとなの姿すがたにこしらへられ

しより二十二けふの今日けふまでに、下宿屋げしゆくやずまゐ住居はんぶんを半はんぶん分ぶんと見みつもりて

も出入でいり三年ねんはたしかに世話せわをうけ、伯父おぢの勝義かつよしが性せい質しつの氣き

むづかしい處ところから、無敵むてきにわけのわからぬ強情がうじようの加か 《たゞ

く》女房にようぼうにばかり手てやはらかなる可笑をかしさも吞込のみこめば、伯

母ぼなる人ひとが口くち先さきばかりの利口りこうにて誰たれにつきても根ねからさつば

り親切しんせつげ氣けのなき、我欲がよくの目當めあてが明あらかに見みえねば笑わらひかけた

口くちもとまで結むすんで見みせる現金げんきんの様やう子すまで、度た 《たびく》の

經驗けいけんに大方おほかたは會得えとくのつきて、此家このやにあらんとは金かねつかひ奇き
 麗れいに損そんをかけず、表おもてむきは何處どこまでも田舎書生いなかじよせいの厄介やつかい者が舞ま
 ひこみて御世話おせわに相成あいなるといふこしらへでなくては第一だいに伯母御おばご
 前まへが御機嫌ごぎげんむづかし、上杉うえすぎといふ苗字めうじをば宜よいことにして大名だいいめう
 の分家ぶんけと利きかせる見得みえぼうの上うへなし、下女げじよには奥様おくさまといはせ、
 着物きものは裾すそのながいを引ひいて、用ようをすれば肩かたがはるといふ、三十圓そんげん
 どりの會社員くわいしやめんの妻つまが此形粧このげうそうにて繰廻くりまわしゆく家いへの中うちおもへ
 ば此このをんな女こりこうが小利口さいかくの才覺さいかくひとつにて、良人おつとが箔はくの光ひかつて見みゆ
 るやら知らねども、失敬しつげいなは野澤桂次のざわけいじといふ見事立派みごとりつぱの名前なまへあ
 る男をとこを、かげに廻まわりては家うちの書生しよせいがと安やす々くこなされて、御おげん
 玄關番くわんばん同様どうやうにいはれる事馬鹿ことばからしさの頂てうじよう上なれば、こ

れのみにても寄りつかれぬ價值はたしかなるに、しかも此家の立
 はなれにくく、心わるきまゝ下宿屋あるきと思案をさだめても
 二週間と訪問を絶ちがたきはあやし。
 十年ばかり前にうせたる先妻の腹にぬひと呼ばれて、今の奥
 様には繼なる娘あり、桂次がはじめて見し時は十四か三か、唐
 人鬻に赤き切れかけて、姿はおさなびたれども母のちがふ子は
 何處やらをとなく見ゆるものと氣の毒に思ひしは、我れも他人
 の手にて育ちし同情を持ってばなり、何事も母親に氣をか
 ね、父にまで遠慮がちなれば自づから詞かずも多からず、一目
 に見わたした處では柔和しい温順の娘といふばかり、格別利發
 ともはげしいとも人は思ふまじ、父母そろひて家の内に籠り居

にも濟むべき娘が、人目に立つほど才女など呼ばるゝは大
 方お侠の飛びあがりの、甘やかされの我まゝの、つゝしみなき
 高慢より立つ名なるべく、物にはゞかる心ありて萬ひかへ目に
 と氣をつくれれば、十が七に見えて三分の損はあるものと桂次は故
 郷のお作が上まで思ひくらべて、いよくおぬひが身のいたま
 しく、伯母が高慢がほはつく／＼と嫌やなれども、あの高
 慢にあの温順なる身にて事なく仕へんとする氣苦勞を思ひやれ
 ば、せめては傍近くに心ぞへをも爲し、慰めにも爲りてやり度と、
 人知らば可笑かるべき自ほれも手傳ひて、おぬひの事といへば我
 が事のように喜びもし怒りもして過ぎ來つるを、見すて、我れ今
 故郷にかへらば残れる身の心ほそさいかばかりなるべき、あは

れなるは繼子の身分にして、腑甲斐ないものは養子の我れと、今更まさらのやうに世よの中なかのあぢきなきを思おもひぬ。

(中)

まゝ母育はくそだちとて誰たれもいふ事ことなれど、あるが中なかにも女をんなの子この大おほか方たすなほに生おひたつは稀まれなり、少すこし世間せけん並除なみのりけ物の緩ゆるい子こは、底意そこいぢ地ちはつて馬鹿強情ばかごうじようなど人ひとに嫌きらはるゝ事ことの上うへなし、小利口こりこうなるは狡ずるき性根せうねをやしなうて面めんかぶりの大變たいへんものに成なるもあり、しやんとせし氣性きせうありて人にんげん間の質たちの正せうぢき直ちきなるは、すね者ものの部ぶ類るいにまぎれて其身そのみに取とれば生せうがい涯がいの損そんおもふべし、上杉うへすぎのおぬ

ひと言ふ娘、桂次がのぼせるだけ容貌も十人なみ少しあがりて、
 よみ書き十露盤それは小學校にて學びし丈のことは出來て、我
 が名にちなめる針仕事は袴の仕立までわけなきよし、十歳ばかり
 の頃までは相應に惡戯もつよく、女にしてはと亡き母親
 に眉根を寄せさして、ほころびの小言も十分に聞きし物なり、今
 の母は父親が上役なりし人の隠し妻とやらお妾とやら、種々
 々、曰くのつきし難物のよしなれども、持ねばならぬ義理あり
 て引うけしにや、それとも父が好みて申受しか、その邊たしかな
 らねど勢、力おさく女房天下と申やうな景色なれば、まゝ
 子たる身のおぬひが此瀬に立ちて泣くは道理なり、もの言へば睨
 まれ、笑へば怒られ、氣を利かせれば小ざかしと云ひ、ひかえ目

にあれば鈍どんな子こと叱しかられる、二葉ばの新芽しんめに雪霜ゆきしものふりかゝり
 て、これでも延のびるかおきと押おきへるやうな仕方しかたに、堪たへて眞直まつすぐに延の
 びたつ事こと人間にんげんわぎには叶かなふまじ、泣ないて泣ないて泣なき盡つくくして、
 ううつた訴うへたいにも父ちちの心こころは鐵かねのやうに冷ひえて、ぬる湯ゆ一杯ぱいたまはらん
 ななきけ情なさけもなきに、まして他人たにんの誰たれにか慨かこつべき、月つきの十日じゅうにちに母はさま
 が御墓おんはかままるりを谷中やなかの寺てらに樂たのしみて、しきみ線せんかう香夫かう 《それ
 く》の供そなへ物ものもまだ終おはらぬに、母はさま母はさま私わたしを引取ひきとつて下くださ
 れと石塔せきたうに抱いだきつきて遠慮えんりよなき熱ねつ涙なみだ、苔こけのしたにて聞きかば
 石いしもゆるぐべし、井戸ゐどがはに手てを掛かけて水みづをのぞきし事こと三四度さんどに及およ
 びしが、つく／＼おも思もへば無情つれなしとても父とく様さまは眞實まことのなるに、
 我われはかなく成なりて宜よからぬ名なを人ひとの耳みみに傳つたへれば、殘のこれる耻はじは

誰が上ならず、勿躰なき身の覺悟と心の中に侘言して、どう
 でも死なれぬ世に生中目を明きて過ぎんとすれば、人並のう
 い事つらい事、さりとは此身に堪へがたし、一生五十年めくらに
 成りて終らば事なからんと夫れよりは一筋に母様の御機嫌、父
 が氣に入るやう一切この身を無いものにして勤むれば家の内なみ
 風おこらずして、軒ばの松に鶴が來て巢をくひはせぬか、これを
 世間の目に何と見るらん、母御は世辭上手にて人を外らさぬ甘
 さあれば、身を無いものにして闇をたどる娘よりも、一枚あがり
 て、評判判わるからぬやら。

お縫とてもまだ年わかななる身の桂次が親切はうれしからぬに非
 ず、親にすら捨てられたらんやうな我が如きものを、心にかけて

可愛がりて下さるは辱けなき事と思へども、桂次が思ひやりに比
 べては遙かに落つきて冷やかなる物なり、おぬひさむ我れがいよ
 く歸國したと成つたならば、あなたは何と思ふて下さろう、朝
 夕の手がはぶけて、厄介が 《たびく》 御出あそばして下
 さりませうか、そうならば嬉しけれど、言ふ、我れとても行きたく
 くてゆく故郷でなければ、此處に居られる物なら歸るではなく、
 出て來られる都合ならば又今までのやうにお世話に成りに來ます
 る、成るべくは鳥渡たち歸りに直ぐも出京したきものと輕
 くいへば、それでもあなたは一家の御主人さまに成りて采配
 をおとりなさらずは叶ふまじ、今までのやうなお樂の御身分では
 いらつしやらぬ筈と押へられて、されば誠に大難に逢ひたる身

と思しめせ。

我が養家は、大藤村の中萩原とて、見わたす限りは天目山、

大菩薩峠の山 《やま〜》峰 《みね〜》垣をつくりて、

西南にそびゆる白妙の富士の嶺は、をしみて面かげを示めさ

ねども、冬の雪おろしは遠慮なく身をきる寒さ、魚といひては

甲府まで五里の道を取りにやりて、やう〜の刺身が口に入る

位、あなたは御存じなけれどお親父さんに聞て見給へ、それは随

分不便利にて不潔にて、東京より歸りたる夏分などは我まん

のなりがたき事もあり、そんな處に我れは括られて、面白くも

ない仕事に追はれて、逢ひたい人には逢はれず、見たい土地はふ

み難く、兀々として月日を送らねばならぬかと思に、氣のふさ

ぐも道理だうりとせめては貴嬢あなたでもあはれんでくれ給へ、可愛かわいさうなものでは無なきかと言いふに、あなたは左様さうおつ仰おつしやれど母ははなどはお浦うらや山ましき御身分ごみぶんと申をて居をりまする。

何なにが此こん様な身分みぶんうら山やましい事ことか、こゝで我われが幸しやわせ福ふといふを考かんがへれば、歸國きこくするに先さきだちてお作さくが頓死とんしするといふ様やうなことにな

らば、一人娘ひとりむすめのことゆゑ父親てゝおやおどろいて暫時しばしは家督かどく沙汰ぎたやめになるべく、然しかるうちに少々せうくなりともやかましき財産ざいさんなどの

有あれば、みすく他人たにんなる我われに引ひわたす事ことをしくも成なるべく、
又または縁者ゑんじやの中うちなる欲よくばりども唯ただにはあらで運動うんどうすることたし

かなり、その曉あかつきに何なにかいさゝか仕損しそんなるでもこしらゆれば我われは首尾しゆびよく離縁りえんになりて、一本立ぼんたちの野中のなかの杉すぎともならば、其それより

は我が自由にて其時に幸福といふ詞を與へ給へと笑ふに、お
 ぬひ惘れて貴君は其様の事正氣で仰しやりますか、平常はやさ
 しい方と存じましたに、お作様に頓死しろとは蔭ながらの嘘に
 しろあんまりでござります、お可愛想なことをと少し涙くんで
 お作をかばふに、それは貴嬢が當人を見ぬゆゑ可愛想とも思ふ
 か知らねど、お作よりは我れの方を憐れんでくれて宜い筈、目に
 見えぬ繩につながれて引かれてゆくやうな我れをば、あなたは眞
 の處何とも思ふてくれねば、勝手にしろといふ風で我れの事とて
 は少しも察してくる様子が見えぬ、今も今居なくなつたら淋し
 かりうとお言ひなされたはほんの口先の世辭で、あんな者は早
 く出てゆけと筈に、ろぼそく成りますとて身をちぢめて引退

くに、桂次拍子ぬけのしていよく頭の重たくなりぬ。

上杉の隣家は何宗かの御梵刹さまにて寺内廣々と桃櫻いろ

く植わたしたれば、此方の二階より見おろすに雲は棚曳く天

上界に似て、腰ごろもの観音さま濡れ佛にておはします

御肩のあたり膝のあたり、はらくと花散りこぼれて前に供へ

し櫛の枝につもれるもをかしく、下ゆく子守りが鉢巻の上へ、

しばしやどかせ春のゆく衛と舞ひくるもみゆ、かすむ夕べの朧

月よに人顔ほの／＼と暗く成りて、風少しそふ寺内の花を

ば去歳も一昨年も其まへの年も、桂次此處に大方は宿を定めて、

ぶら／＼あるきに立ならしたる處なれば、今歳この度とりわけ

て珍らしきさまにもあらぬを、今こん春はとても立かへり踏べき

地ちにあらずと思おもふに、ここの濡ぬれ佛ほとけさまにも中なか々の名な残ごりをしま
 れて、夕ゆふげ終おはりての宵よひ々々家いえを出いでては御おん寺てら參まいり殊しゆ勝しょうに、觀く
 わんをん
 音おとさまには合あ掌しょうを申まうて、我わが戀こひ人びとのゆく末すゑを守まもり玉たまへ
 と、お志こころざししのほどいつまでも消きえねば宜よいが。

(下)

我われのみ一人ひとりのぼせて耳みみ鳴なりやすやすべき桂けい次じが熱ねつははげしけれども、
 おぬひと言いふもの木きにて作つくられたるやうの人ひとなれば、まづは上うへす
 杉ぎの家いえにやかましき沙さ汰たもおこらず、大おほ藤ふぢ村むらにお作さくが夢ゆめもの
 どかなるべし、四月しがつの十五日ごじゅうごくにち歸きん國こくに極きまりて土みやげ産もの物ものなど折をり柄から

日清の戦争畫、大勝利の袋もの、ぱちん羽織の紐、白粉
 かんざし櫻香の油、縁類廣ければとり／＼に香水、石
 鹼の氣取りたるも買ふめり、おぬひは桂次が未來の妻にと贈り
 もの 中へ薄藤色の縹袴の襟に白ぬきの牡丹花の形あるを
 やりけるに、これを眺めし時の桂次が顔、氣の毒らしかりしと後
 にて下女の竹が申き。

桂次がもとへ送りこしたる寫眞はあれども、秘しがくしに取
 納めて人には見せぬか、夫れとも人しらぬ火鉢の灰になり終り
 しか、桂次ならぬもの知るによしなけれど、さる頃はがきにて處
 よう用と申こしたる文面は男の通りにて名書きも六藏の分なりし
 かど、手跡大分あがりて見よげに成りしと父親の自まんより、

むすめか娘に書かせたる事論なしとこゝの内儀が人の悪き目にて睨みぬ、
 手跡しゆせきによりて人の顔つきを思ひやるは、名を聞いて人の善悪
はんだんを判断するやうなもの、當代の能書に業平さまならぬも
 おはしますぞかし、されども心用こころもちひ一つにて悪筆なりとも
み見よげのしたゝめ方かたはあるべきと、達者たつしやめかして筋すぢもなき走り
が書きに人ひとよみがたき文字もじならば詮せんなし、お作さくの手てはいかなりしか
し知らねど、此處こゝの内儀ないぎが目の前まへにうかびたる形かたちは、横巾よこはばひろく
たけ長つまりし顔かほに、目鼻めはなだちはまづくもあるまじけれど、うすく
くびすぢして首筋くびすぢくつきりとせず、胴どうよりは足あしの長い女をんなとおぼゆると言い
ふふ、すて筆ふでながく引ひいて見みともなかりしか可笑をかし、桂次けいじは東とうきや
う京うに見みてさへ醜わるい方ほうでは無いに、大藤村おほふぢむらの光ひかる君きみ歸郷きようと

いふ事ことにならば、機場はたばの女をんなが白粉おしろいのぬりかた思おもはれると此處こゝにて
 の取沙汰とりさた、容貌きりようのわるい妻つまを持つぐらゐ我慢がまんもなる筈はず、水呑みづの
 の小作こさくが子ことして一足飛そとびのお大盡だいじんなればと、やがては實家じつかをさ
 へ洗あえあはれて、人ひとの口くちさがなし伯父そぢ伯母おば一つになつて嘲あざけるやうな口
 調てうを、桂次けいじが耳みみに入いらぬこそよけれ、一人氣ひとりきの毒どくと思おもふはお縫ぬひな
 り。

荷物にもつは通運便つううんびんにて先さきへたゝせたれば残のこるは身み一つに輕かる へかる
 〃 〳〵 しき桂次けいじ、今日けふも明日あすもと友とも達だちのもとを馳はせめぐりて
 何なにやらん用事ようじはあるものなり、僅わづかなる人目ひとめの暇ひまを求めてお縫ぬひが
 袂たもとをひかえ、我われは君きみに厭いとはれて別わかるゝなれども夢ゆめいさゝか恨うらむ
 事ことをばなすまじ、君きみはおのづから君きみの本地ほんちありて其島田そのしまだをば丸ま

曲にゆひかへる折のきたるべく、うつくしき乳房を可愛き人に
 含まする時もあるべし、我れは唯だ君の身の幸福なれかし、す
 こやかなれかしと祈りて此長き世をば盡さんには随分とも親
 孝行にてあられよ、母御前の意地わるに逆らふやうの事は君と
 して無きに相違なけれどもこれ第一に心がけ給へ、言ふことは多
 し、思ふことは多し、我れは世を終るまで君のもとへ文の便りを
 たゞざるべければ、君よりも十通に一度の返事を與へ給へ、睡り
 がたき秋の夜は胸に抱いてまぼろしの面影をも見んと、このや
 うの數 《かずく》を並らべて男なきに涙のこぼれるに、ふり
 仰向てはんけちに顔を拭ふさま、心よわげなれど誰れもこんな物
 なるべし、今から歸るといふ故郷の事養家のこと、我身の事お

作さくの事ことみなから忘わすれて世よはお縫ぬいひとりのやうに思おもはるゝも闇やみなり、
このとき此時こゝろこんな場合ばあいにはかなき女をんな心こゝろの引ひき入いれられて、一生せうき消きえ
 ぬかなしき影かげを胸むねにきざむ人ひともあり、岩木いわきのやうなるお縫ぬいなれば
なに おも何なにと思おもひしかは知しらねども、涙なみだほろゝこぼれて一ことト言こともなし。
はる よ ゆめ春はるの夜よの夢ゆめのうき橋はし、と絶だえする横よこぐもの空そらに東京とうけうを思おもひ立たちて、
みち道みちよりもあれば新しゆじゆく宿ゆくまでは腕くるま車まがよしといふ、八王子わうじまでは
きしや なか汽車きしやの中なか、をりればやがて馬ばしや車まにゆられて、小佛こほとけの峠とうげもほどな
こく越こゆれば、上野原うへのはら、つる川かは、野田尻のたじり、犬目いぬめ、鳥澤とりざわも過すぐれ
さる ちかば猿さるはし近ちかくに其夜そのよは宿やどるべし、巴峽はきようのさけびは聞きこえぬまでも、
ふるふきがは ひや笛吹川ふるふきがはの響ひやきに夢ゆめむすび憂うく、これにも腸はらわたはたゝるべき聲こゑあり、
かつぬま はがき勝沼かつぬまよりの端書はがき一度とゞきて四日目にぞ七里さとの消印けしんある封ふうじ

状やう二つ、一つはお縫ぬひへ向むけてこれは長ながかりし、桂次けいじはかくて大
 藤村ほふじむらの人に成なりぬ。

世よにたのまれぬを男をとこ心こころといふ、それよ秋あきの空そらの夕日ゆふひにはかに
 掻かきくもりて、傘かさなき野道のみちに横よこしぶきの難義なんぎさ、出であひし物ものはみ
 な其その様やうに申まをせども是これみな時ときのはづみぞかし、波なみこえよとて末すゑ
 の松まつ山やまちぎれるもなく、男をとこ傾城けいせいならぬ身みの空涙そなみだこぼして何なに
 に成なるべきや、昨日きのふあはれと見みしは昨日きのふのあはれ、今日けふの我わが身み
 に爲なす業わざしげゝれば、忘わするゝとなしに忘わすれて一生せうは夢ゆめの如ごとし、露つゆ
 の世よといへばほろりとせしもの、はかないの上うへなしなり、思おもへば
 男をとこは結いひ髪なづけの妻つまある身み、いやとても應おうとても浮世うきよの義理ぎりをおも

ひ断つほどのこと此一人此身にして叶ふべしや、事なく高砂を
 うたひ納むれば、即ち新らしき一對の夫婦出来あがりて、やがて
 は父とも言はるべき身なり、諸縁これより引かれて断ちがたき
 絆次第にふゆれば、一人一箇の野澤桂次ならず、運よくは萬の身
 代十萬に延して山梨縣の多額納税と銘うたんも斗りがたけ
 れど、契りし詞はあとの湊に残して、舟は流れに隨がひ人は世に
 引かれて、遠ざかりゆく事千里、二千里、一萬里、此處三十里の
 隔てなれども心かよはずは八重がすみ外山の峰をかくすに似たり、
 花ちりて青葉の頃までにお縫が手もとに文三通、こと細か成ける
 よし、五月雨軒ばに晴れまなく人戀しき折ふし、彼方よりも數
 《かずく》思ひ出の詞うれしく見つる、夫れも過ぎては月に

一二度の便り、はじめは三四度も有りけるを後には一度の月ある
 を恨みしが、秋蠶のはきたてとかいへるに懸りしより、二月に一
 度、三月に一度、今の間に半年目、一年目、年始の状と暑中
 見舞の突際になりて、文言うるさしとならば端書にても事
 は足るべし、あはれ可笑しと軒ばの櫻くる年も笑ふて、隣の寺の
 観音様御手を膝に柔和の御相これも笑めるが如く、若いさか
 りの熱といふ物にあはれみ給へば、此處なる冷やかのお縫も笑く
 ぼを頬にかべて世に立つ事はならぬか、相かはらず父様の御
 機嫌、母の氣をはかりて、我身をない物にして上杉家の安隱
 をはかりぬれど。ほころびが切れてはむづかし

青空文庫情報

底本：「太陽 第壹卷第五號」博文館

1895（明治28）年5月5日発行

初出：「太陽 第壹卷第五號」博文館

1895（明治28）年5月5日発行

※「男」に対するルビの「を」と「おとこ」、「頂上」に対するルビの「てうじょう」と「ちやうじょう」、「可愛」に対するルビの「かあい」と「かわいい」、「可愛想」に対するルビの「かわいそう」と「かわいさう」の混在は、底本通りです。

※変体仮名は、通常の仮名で入力しました。

入力：万波通彦

校正：猫の手ぴい

2018年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ゆく雲

一葉女史

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>